

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

学校の復興を地域復興のひとつのステップに

井上ひさしさんが脚本を手がけられた名作人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルになった小島が沖に浮かぶ岩手県大槌町。3月11日のあの日、地震と津波で大きな被害にあったこの町で「被災地支援・教育復興ボランティア」に参加しました。

被災した小学校と中学校が仮設校舎に引っ越すということで、それらの学校の備品の搬入が主な活動内容でした。岩手ということで盛岡から現地までのバスの車窓から奥州藤原氏の栄華や民俗学の泰斗、柳田国男の世界を漠然と感じながら移動した私は、宿泊地の釜石市について驚かされました。市内の街灯が点灯していないだけでなく、市街地の交差点の信号すら点いていない様子、一階部分が津波に流された店舗など生活復興の道程の険しさを感じずにはいられませんでした。

次の日、大槌町に移動し、引っ越し作業に入りました。作業自体は多くのボランティア参加者や保護者、町教委、学校職員の連携でスムーズに行われ、予定より早い時間に終了しました。小学1年生の教室環境を整備されていた担任の先生が「10月から疎開先から子どもが一人戻ってくるのは嬉しいのですが、他の子が転出する予定なんです。」「来週から子どもがきたら、生活科の“学校探検”をやりなおします…。」という言葉が印象に残りました。



(仮設校舎の様子)

午後からは岩手県教職員組合釜石支部の書記長の案内で、実際に被災した学校を見ることになりました。「百聞は一見にしかず」とはまさにこのことで、ニュースの報道や報道検証番組で何度となく見てきた映像からは感じるできない厳しい現実言葉に失いました。

大槌小学校の津波後に起こった火災跡や、町の高台から見た町の中心部、大槌北小学校の波にのまれた体育館、安渡小学校、地区全体が孤立した赤浜小学校の様子は改めて被害の大きさを感じました。また、これまで校内放送の指示をもとに避難訓練をしていた経験は、地震で電源がなくなり校内放送が使用できない状況では役に立たず臨機応変の対応が必要になったことや、発災当初ここまでの長期避難を想定しておらず、着の身着のまま避難した結果、避難所の防寒対策に課題が残ったこと、津波で履物が流され素足で瓦礫の上を避難する困難さなど初めて知る多くの現実がありました。



(大槌北小学校体育館の様子)

今回のボランティアに参加して多くのことを考えさせられました。大槌町の子どもの学習する環境が他校や隣町の施設の間借り状態から、仮設ながらも自分たちの校舎が建設されたことは復興への小さな一歩だったと思います。またその作業の一部にわずかながら貢献することができたことは個人的にもいい経験になりました。